新潟市内での戦争体験　　長　道雄

1　機雷（注１）爆発

大東亜戦争（第２次世界大戦）が始まって１カ月足らずの1942年（昭和17年）元旦。

新潟中学校１年生の私は、学校に登校し、朝８時40分頃から国歌斉唱、勅語（注２）奉読などの式を終え、午前中に家に帰った。

午後２時頃、町内会から「二葉町１丁目、２丁目は全員避難せよ。広小路浜（注３）に浮遊機雷がうち上げられたので爆破処理する。

家のガラスの割れを防ぐために、戸や窓は開け放しにせよ。」という緊急連絡があった。

時々、雪がちらついていたが、積もらず、風も弱く、穏やかな日だった。爆破処理は午後３時の予定という。マントを着て、制帽をかぶり、歩いて５分あまりの大畑校へ行ったが、何の連絡もないので、中学４年生の兄と私は、古町方面に散歩に出かけた。商店街は、元日で休みなので、再び柾谷小路を戻り、県立図書館の十字路まで来たら、突然「ドドドドダダーン」と大音響と爆風がきた。柾谷小路両側の建物と窓ガラスなどの振動と音響が萬代橋方向にビリビリと反響して、広い柾谷小路を遠ざかっていくように聞こえた。爆風で両耳の鼓膜がグッと押される感じもした。

腕時計を見たら「３時15分」、元日の年賀や神社参拝で歩いていた通行人は、機雷とは知ら

（注１）機雷（きらい）
鋼缶に多量の爆薬を詰めて水中に敷設あるいは浮流させ、艦船の接触や接近により爆発させて破壊する兵器。音響機雷・磁気機雷など。
長さんのお話では、うち上げられたのは、ソ連製の機雷であったとのこと。

（注２）教育ニ関スル勅語
日本の教育の基本方針を示した明治天皇の勅語。1890年（明治23）10月30日発布。忠君愛国を国民道徳として強調しました。
第一回帝国議会の開会直前に発布、学校教育を通じて国民に強制され、天皇制の精神的・道徳的支柱となりました。1948年（昭和23）廃止。

（注３）広小路浜
長さんのお話では、現在の二葉中学校裏の、浜一帯は当時そう呼ばれていたとのこと。

されず、何の音かと驚いていたが、兄と私はもう安心と思い、走って家へと急いだ。現在の二葉中学校の坂下にある交番のＴ字路は、人で溢れていた。「何があったんだ？」と騒ぐ人もいた。交通規制で坂は通れないので、磯辺小路経由で石段を登り家についた。

応接間のガラス戸は、開けておいたのに、重ねた２枚とも割れ、剥がれた白壁と共に床上に散乱していた。裏口の戸も壊れていた。２階のご先祖様の位牌にお供えした、榊、餅、ミカン、塩引鮭などは、階段の途中まで落ちていた。（注４）

２日後に業者が来て、裏口と応接間は修理された。母が近所の奥様方から聞いた話では、機雷処理当日、海岸の砂浜で爆破処理の監視や見物人を排除する役目をしていた坂内小路の毛糸屋さんのご主人が、予想もしない大爆発の衝撃で砂の上に倒れて腰を抜かし、起き上がれなかったと皆に笑われていたそうだ。また、爆発音は、亀田町や北蒲原郡の中条町でも聞こえた人がいたという。

さらに、１月５日の午後２時過ぎ、家にいた私たちは、またも爆発音を聞いた。それは、元日の時よりは遥かに小さい音で、夕刊に「新潟港突堤沖にソ連製の機雷が発見され爆破処理した」とあった。

翌 1943 年（昭和 18 年）元旦、雪の日だった。家にいたら、午前 10 時頃、松林の方から「ドーン」という音が聞こえた。日和山海岸で

（注４）機雷の爆破処理
長さんのお話では、二葉中学校の窓ガラスが、何百枚も割れたと聞いているとのこと。

爆発した機雷(きらい)だった。

２年連続で、私たちは元旦に戦争の「落とし玉」を貰(もら)ったのだった。

２　戦死者の出迎え

中学３年生の私が、午後の下校途中、二葉町の家まで20分あまり歩く間に、白木(しらき)の門牌(もんぱい)（注５）を立てた家が３軒もあった。皆戦死と書かれている。異常に多いと思った。

翌日、1943年（昭和18年）７月６日の朝、登校前に家で新聞を見てびっくりした。２ページ増しの紙面にびっしりと戦死者のお名前が掲載(けいさい)されている。新潟県全体で２、885柱(はしら)（注６）、新潟市出身者だけでも247柱(はしら)もある。

前年８月から年末までガダルカナル島の苦しい戦いで亡くなった将兵(しょうへい)のことは噂(うわさ)でうすうす知っていたが、新潟県出身者がこんなにも大勢だとは知らなかった。

新聞を読んでいた母がいとこの弥彦村出身、大久保道彦軍曹(ぐんそう)の名前を見つけた。

何年か前に越後線で母と弥彦神社参拝(さんぱい)に行った時、白い着物に空色の袴(はかま)をつけて、境内(けいだい)をほうきで清掃(せいそう)していた神官の道彦さんにお会いしたことがあり、しばらく立ち話をしたことを私は思い出した。

道彦さんの、目が大きいその笑顔を、私はハッキリと覚えている。

新発田の歩兵16連隊に召集(しょうしゅう)（注７）されたのは知っていたが、もう生きては帰ってこな

（注５）門牌
関東以北の諸県で葬家の忌中標識。葬式のとき「忌中」などと書いて門口に立てる木の札。もんぱい。

（注６）柱
死者の霊を数えるのに用います。

（注７）召集令状
もと、在郷軍人を軍隊に召集する際に出された命令書。充員召集・臨時召集・国民兵召集には、特に赤色の紙を用いたところから「赤紙（あかがみ）」と呼ばれました。

い親戚の戦死をしるのは悲しい。

約２週間後の７月28日、私のクラス全員は19時半の汽車で新潟駅に到着する「英霊」（注８）の出迎えを学校から命令された。私達、生徒は駅舎を正面に見る位置の道路沿いに横並びに整列した。駅前広場は出迎えの人で溢れ、戦死者の名を書いた数え切れぬほど多数の白布の幟が、夕暮れの空に揺れていた。

汽車が到着し、やがて改札口を出てきた人の首にかけられて白布に包まれた四角の遺骨箱と幟を持つ人が一対になり、各町内会ごとに遺骨を胸に抱いた人と後に続く人の行列が私達の前を次々に無言で通り過ぎていく。そのたびに私達は無言で最敬礼してお送りした。これが「無言の凱旋」（注９）というものなのだ。

この方々は、それぞれ何年か前のある日、召集令状が来て、軍隊に入る時に、町内会の大人や子供が幟と日の丸の旗を振り、吹奏楽器で賑やかに歌いながら萬代橋を渡り、新潟駅発の汽車で「万歳、万歳」と歓呼（注１０）の声に送られて行ったのだと思うと、何とも言えない気持だった。

行列は約40分間続いた。駅前広場の人も少なくなり、私達も現地解散で分散した。

萬代橋から柾谷小路を歩いて帰る途中も沿道に「英霊」のお出迎えをした大勢の人が並んでどこまでも続いていた。

私の母は５日後の８月２日、道彦さんのお葬式に弥彦に行った。

（注８）英霊
霊魂。特に、戦死者の魂を敬っていう語。

（注９）凱旋
戦争に勝って帰ってくること。成功を収めて帰ってくること。

（注１０）歓呼
喜んで大きな声をあげること。

長さんは、出征する兵士を歌を歌いながら駅まで送り歩いたとのことです。

出征兵士を送る歌

天に代りて不義を撃つ
忠勇無双の我が兵は
歓呼の声に送られて
今ぞ出で立つ父母の国
勝たずば生きて帰らじと
誓う心の勇ましさ

（２番以下省略）

遺骨箱に入っていたのが何だったのか、当時の私の日記には書かれていない。

新潟市内にこんなに沢山の門牌が一時に立ったのは、それ以前にも、69年後の今でも無かった。将来も決してあってはならない。

3　米軍機の機雷投下と撃墜

1945年(昭和20年)5～8月は、新潟港封鎖（注11）目的のボーイングB-29爆撃機の機雷投下（注12）が何回もあった。

深夜1機ずつ海の方から来て、栄小学校より遠くの低空を、数本の探照灯（注13）の光に挟まれ、対空砲火（注14）の曳光弾（注15）に囲まれたB-29が、信濃川河口付近で白い落下傘を次々と落として東に消え去るのが我が家の2階の窓からよく見えた。

7月20日に撃墜された1機はよく覚えている。

その夜も空襲警報のサイレンで目を覚まし、敵機は佐渡付近とラジオが知らせる間もなく、B-29独特の低い唸るような音がだんだんと聞こえてきた。

2階の窓を開けたら、真上に大きなB-29が西から低空で現れた。いつもと違い、市の中心コースなので私は外に出た。対空砲火と探照灯の音と光が激しい中、真上を少し過ぎた飛行機が一瞬強烈な白く丸い光で機体が眩しくてよく見えなくなった。

名古屋でB-29がまず落下傘つきの

（注11）新潟港封鎖
日本軍の補給と移動を阻止すること、日本への原材料と食料の輸入を阻止することを目的としたアメリカ軍の作戦。「飢餓作戦」。
日本本土沿岸の海上輸送網を寸断するため、1945年（昭和20年）3月に関門海峡に機雷を投下してから敗戦までの5ヶ月間に日本近海に1万2千個の機雷が投下されました。
アメリカ軍は、新潟を本州北部日本海側の第1級の機雷攻撃目標に定めていました。
同年5月14日、新潟市に初めての空襲があり、8月1日まで12回にわたって機雷が投下され、投下数はわかっているだけで781個に達しました。

出典：戦場としての新潟

（注12）機雷投下
長さんの話では、機雷の投下は毎晩のようにあったとのこと。
B-29の撃墜の様子は、二葉町の高台から、墜落までが、よく見えていたとのこと。
B-29を狙って、県庁あたり（現在の新潟市役所付近）から対空砲火があったとのこと。

（注13）探照灯
アーク灯を光源とし、反射鏡で平行光線として遠方まで照射できるようにした灯。サーチライト。

（注14）対空砲火
空からの攻撃に対する地上・海上からの砲撃。

（注15）曳光弾
弾道や着弾点がわかりやすいように、弾底から光を放ちながら飛ぶ弾丸。

照明弾（注16）、次に焼夷弾（注17）で町を焼き払ったのを何度も体験した私は、今日は機雷ではなく民家を焼く焼夷弾攻撃だと思ったが、隣家の五十嵐さんのお父さんが「当たった。当たった。バンザーイ。」と両手を挙げた。

よく見ると、その光は飛行機と共に動いているので、私も照明弾ではなく、命中したのだとわかった。飛び続けるB-29は探照灯が消え砲火も止んだ暗闇と静寂の空を南東に遠ざかっていき、数分後に火の玉が突然２つに分かれ、ゆっくりと落ちて見えなくなった。

次のB-29も探照灯に捉えられた。市内各所から飛行機を囲むように撃ち上げる対空砲火の曳光弾は、オレンジ色の放物線に見える光の速度が上空に行くほど遅くなる。大きな音で発射される高射砲弾（注18）は、暗い空で地味な暗橙色で炸裂する。このB-29は、地上に向けて真っ赤な色の曳光弾を連続して打ち返しながら、東の暗闇に見えなくなった。

ラジオで「新潟市の地上制空部隊は敵１機を撃墜した。」と速報され、更に「もう１機を撃墜、３機を撃破、今夜は全機を撃砕した。」と放送された。（戦後、撃墜１機以外は損害なしとわかった。）

数日後、亀田に住む同級生の谷君が「撃墜したB-29（注19）の搭乗員数名が、翌朝、眼隠しでトラックに乗せられ、同乗の日本軍憲兵（注20）らが、空き缶をガンガンと叩きながら、亀田町を新潟方面に行くのを見た」と私に教え

（注16）照明弾
夜間の戦闘で照明や信号に用いる弾丸。主としてマグネシウムを用い、数秒から数分光を発します。

（注17）焼夷弾
火炎や高熱によって人や建造物などを殺傷・破壊する爆弾・砲弾。テルミット・油脂などを焼夷剤とします。

（注18）高射砲
航空機を撃墜するための中小口径砲。旧陸軍の呼称で、海軍では高角砲と称しました。

（注19）撃墜されたB-29
中蒲原郡横越村（現在の新潟市江南区）沢海（そうみ）焼山地内の畑に落ちました。

（注20）憲兵
軍隊内の秩序維持を主任務とする兵隊。日本では1881年（明治14）に陸軍に設置され、犯罪捜査・軍紀維持・思想取り締まりにあたりましたが、次第に権限を拡大し、公安対策・思想弾圧・防諜などにも強い権力をふるいました。

てくれた。

平成24年10月、北方文化博物館で「伊藤家のお宝何だろう展」を拝見したら、展示物の中に六角柱で長さ50ｃｍほどの焼夷弾の空筒があった。

中学４年の名古屋での勤労動員（注21）時に、１個が空中でたくさんに分かれて広範囲に落ちた焼夷弾の六角柱の空筒を私も拾った覚えがある。

学芸員のお話では、沢海に落ちたＢ-29から拾ったもので、筒の中に詰められたドロドロの物質を地元の子供達が燃やして遊んだという。

あのＢ-29は、侵入コースを少し間違えたため、機雷も焼夷弾も落とす暇もなく撃墜されたのだった。

４　新潟臨港埠頭（注22）での荷役（注23）作業

1943年（昭和18年）10月２日（土曜日）、中学３年生の私達は、初めて臨港埠頭で正午まで半日荷役作業を経験した。艀（注24）に乗り、石炭をモッコ（注25）で担ぎ、貨車（注26）まで運ぶ仕事で、頭上を回るクレーンが危険だった。

臨港埠頭で捕虜（注27）を初めて見た印象を、私の日記には「ヒョロ長い尖り鼻の変な顔をした奴が30人ほど石炭のトロッコを押して働いている。手足はとても細く、だらしない格好だ。監視人が棒を持っているのを見て気持ちがよかった。うんと使ってやれ。」と書かれている。

（注21）学徒動員
1938年（昭和13）頃から生産力増強の目的で、中学校以上の学生に強制した勤労動員。44年には学業は事実上停止され、在籍のまま軍需工場などへ動員されました。学徒勤労動員。

（注22）新潟臨港埠頭
埠頭とは、港湾内で、船をつけ、乗客の乗降や貨物の積み降ろしをする区域。陸から海中に突き出させて築いたものと、陸に平行なものがあります。波止場。
1931年（昭和６年）、新潟臨港株式会社（現在の株式会社リンコーコーポレーション）が難工事の末、臨港埠頭と臨港鉄道を完成させました。全国的にも珍しい民間会社が埠頭を完成させ、現在も新潟の経済を支えています。

（注23）荷役
貨物を積んだり降ろしたりすること。また、そうする人。

（注24）艀
波止場と本船との間を往復して、旅客・貨物を運ぶ小舟。艀船。

（注25）モッコ
縄を網のように四角に編み、石や土を入れて四隅をまとめるようにしてかついで運ぶ道具。

（注26）貨車
貨物を運ぶための鉄道の車両。

欧米人に対する当時の私の認識の一例。その年９月私はドイツ映画「世界に告ぐ」を観た。日記に「南アフリカのある国の金鉱山を取ろうとした英国人が、勇敢な現地のボーア人に敗れ、遂に人道を無視して町を焼き、多数の女、子どもを集めて殺し、この国を征服した。獣の英国歴史の映画だ。米英は自己のためなら何でもする。」と書かれている。

以後、臨港埠頭では、何回か弁当持ちで終日働いた。石炭以外にも、大豆、銑鉄（注２８）、電纜（注２９）などの運搬で腹が減る毎日だった。新潟市民は、前年の元日から、米の配給が１日１人２合３勺に減らされていた。（注３０）

級友の発案で、臨港倉庫にたくさんある満州大豆を昼食後の空になった弁当箱に内緒で詰めて家に持って帰るのが広まり、私も母に喜ばれた記憶がある。

「捕虜とは話をするな。学生と言うな。捕虜に分かれば、戦争は日本の敗けと思われる。」と学校から言われたが、英語担当のＳ先生が引率の時に、私らが「捕虜と英語で話して下さい。」と頼むと、「私は敵国人とは口をきかぬ主義だ。」と言われた。

日本軍属の通訳で11月に着任したフィリピン帰りのG先生は、他の組の引率の時、捕虜と話したそうだ。英語授業でG先生の英語の発音と速さは、先生が教科書のどこを今読んでいるのか追いつけぬほど、S先生とは違った。

臨港埠頭の電纜運搬作業で、電纜を巻い

（注２７）捕虜
労働力の不足を補うため、強制的に日本に連れてこられた中国人、朝鮮人、捕虜となった欧米人（アメリカ、イギリス、カナダ、オランダ、ノルウェー、オーストラリア、ニュージーランド）兵士が、厳しい労働・生活条件の下で港だけでなく、新潟市内の工場でも働かされていました。
長さんのお話では、当時臨港埠頭には、オーストラリア人の捕虜がいたとのこと。
また、朝鮮人が捕虜の監督として木の棒を持っていたとのこと。

（注２８）銑鉄
溶鉱炉で鉄鉱石を還元して得られる鉄。数パーセントの炭素のほか、マンガン・ケイ素・リン・硫黄（いおう）などの不純物を含む。

（注２９）電纜
絶縁体でおおった電線、およびその束。ケーブル。

（注３０）配給
統制経済の下で、不足しがちな物資の流通を統制し、特定の機関を通じて一定量ずつ売ること。第二次大戦の戦中・戦後に行われました。
長さんのお話では、各家庭で出る灰も、肥料（カリ）になるとのことで集められたとのこと。

た私の身長より高い直径の、円形木製糸巻きを私が１人で転がして貨車まで運ぶ途中、地面の凹凸で糸巻きが横倒しになり、起こそうとしても私の力ではどうにもならなくて困っていたら、「ＯＫ、ＯＫ」と後ろから大男の捕虜が来て、アッと言う間に１人で持ち上げてくれて、その後、すぐに遠くの捕虜仲間の方へ立ち去って行った。

おかげで私は、再び円形木製糸巻きを転がしていくことができた。

その親切な行動は、捕虜に対する私の認識を少し変える事実だった。

捕虜が収容所で、虐待と誤解した例として、食事に出た「木の根」が実は「ごぼう」の煮つけだったとか、雨天の作業に「蓑笠」（注３１）を着せられた時、焼き殺されると思い、泣いたとかの話も聞いた。

私は、ある民間団体会員として、今までに諸外国の会員家庭滞在の経験がある。

文化、価値観の違いを知り、互いを認め合い、戦争を無くするためには、まず長い目で見た自国の文化、歴史を知る必要がある。

敗戦を境に、両極端の時代を生きる私らの世代は貴重な存在かもしれない。

（注３１）蓑
雨具の一。茅（かや）・菅（すげ）などを編んで作り、肩に羽織って用います。

長さんは、中学４年時に５年生と共に県下の各学校と一緒になって、1944 年（昭和 19 年）８月から 1945 年（昭和 20 年）４月まで、名古屋の飛行機工場で働いたとのこと。

兵舎のような寄宿舎で寝泊りをして生活をしていたとのこと。

名古屋で空襲も経験したとのこと。

その後は、加茂の新潟農林専門学校の１年生となり、小千谷の長者盛に勤労動員で行ったとのこと。

酒造りというよりは、ガソリンが無くなったため、満州からコウリャンを取り寄せ、酒造りの工程でアルコールを取り出し、軍用機の燃料にしようとしていたとのこと。

そこで、終戦の日を迎えたとのこと。